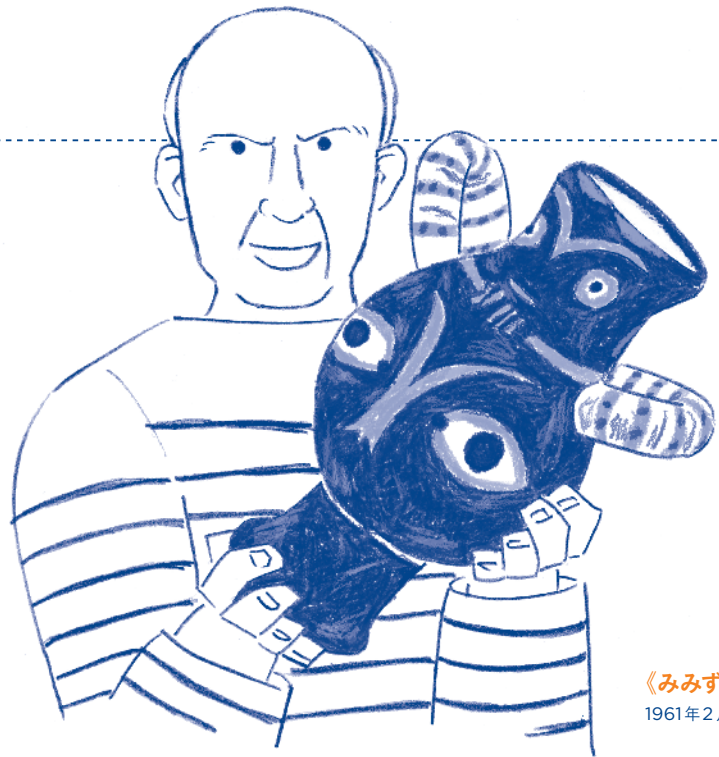


鑑賞の手引き



《みみずく》
1961年2月18日／花瓶

彫刻の森美術館 ピカソ館

彫刻の森美術館のピカソ・コレクションは319点。ピカソの娘であるマヤ・ピカソより購入した陶器を中心に、絵画や彫刻、版画、素描、タピスリー、金のオブジェ、銀製コンポート、ジェマイユなど多彩な技法の作品を見ることができます。1984年にピカソ館を開館して、コレクションを順次公開しています。

彫刻の森美術館
THE HAKONE OPEN-AIR MUSEUM

ピカソの生涯



20世紀を代表するスペインの芸術家パブロ・ピカソ。その人生は、芸術にすべてをささげるもので、さまざまな様式をめまぐるしく変えました。

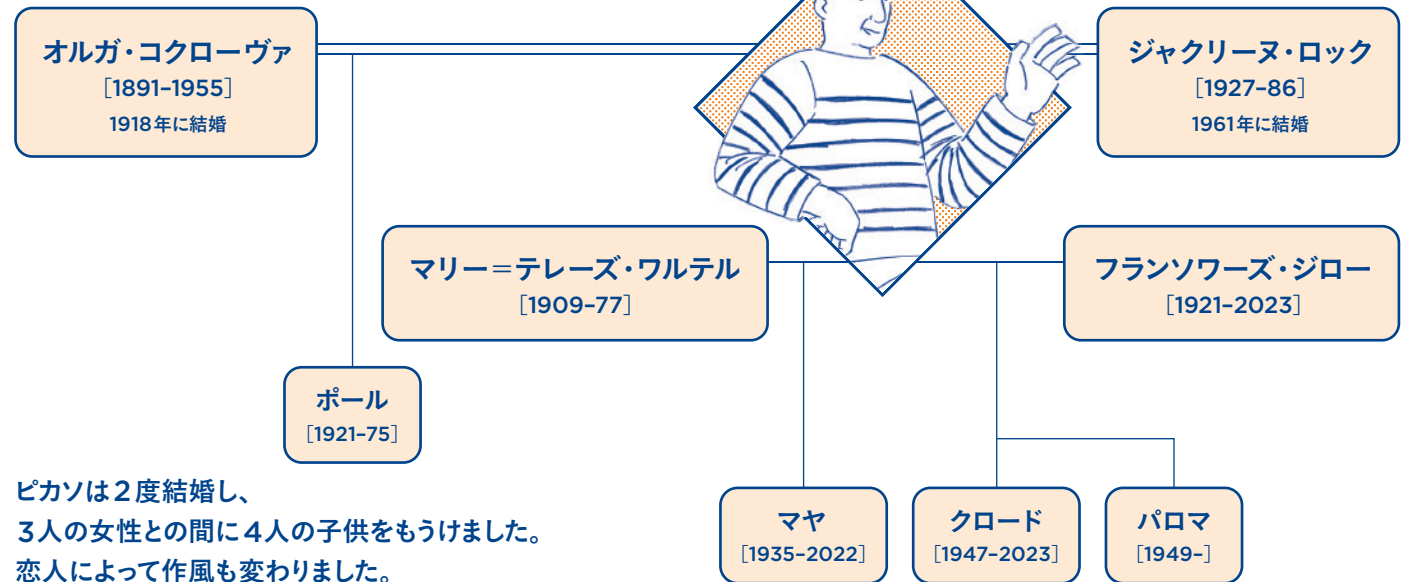
1881	10月25日、スペインのアンダルシア地方マラガに生まれる。
1895 (14歳)	父がバルセロナの美術学校の素描教師となり一家で移転。
1901 (20歳)	親友カサヘマス自殺。〈青の時代〉
1904 (23歳)	パリ、モンマルトルの長屋“洗濯船”に定住。フェルナンド・オリヴィエと同棲。〈バラ色の時代〉
1907 (26歳)	《アヴィニョンの娘たち》完成。
1908 (27歳)	ブラックらとキュビズム開始。〈セザンヌのキュビズム〉
1909 (28歳)	〈分析的キュビズム〉に移行。
1912 (31歳)	バビエ・コレを試みる。〈総合的キュビズム〉に移行。
1918 (37歳)	バレリーナのオルガ・コクローヴァと結婚。〈新古典主義〉
1921 (40歳)	長男ポール誕生。

1927 (46歳)	17歳のマリー＝テレーズ・ワルテルと出会う。
1933 (52歳)	ミノタウロスの連作を始める。
1935 (54歳)	マヤ・ピカソ生まれる。
1936 (55歳)	女流写真家ドラ・マールと知り合う。
1937 (56歳)	パリ万博スペイン共和国館のために《ゲルニカ》制作。
1943 (62歳)	フランソワーズ・ジローと出会う。
1947 (66歳)	陶芸の村ヴァロリスで本格的に陶芸を開始。
1961 (80歳)	ジャクリーヌ・ロックと結婚。ムージャンに住む。
1973 (91歳)	4月8日、ムージャンにて91歳の生涯をとり。

ピカソの系譜

パブロ・ピカソ

[1881-1973]



ピカソは2度結婚し、3人の女性との間に4人の子供をもうけました。恋人によって作風も変わりました。

ピカソのフルネーム

パブロ、ディエゴ、ホセ、フランシスコ・デ・パウラ、フアン・ネボムセノ、マリア・デ・ロス・レメディオス、クリスピン、クリスピニアノ、デ・ラ・サンティシマ・トリニダード、ルイス・イ・ピカソ



Pablo, Diego, José, Francisco de Paula, Juan Nepomuceno, María de los Remedios, Crispín Crispiniano, de la Santísima Trinidad, Ruiz y Picasso

ピカソの洗礼名（フルネーム）は、当時のマラガ地方の慣例に従って、赤ん坊に聖人や縁者にちなんだ沢山の名前がつきました。その上、スペイン人には姓がふたつあって、第1の姓は父方から受け継ぎ、第2の姓は母方から受け継ぐことになっています。

パブロ	=神父で父方の叔父
ディエゴ	=父方の祖父と叔父
ホセ	=父（ホセ・ルイス・ブラスコ）

フランシスコ・デ・パウラ	=母方の祖父
フアン・ネボムセノ	=男性の名づけ親、従兄
マリア・デ・ロス・レメディオス	=女性の名づけ親、従姉
クリスピン、クリスピニアノ	=ピカソが生まれた10月25日に当たる靴職人と手袋職人の守護聖人
デ・ラ・サンティシマ・トリニダード	=三位一体
ルイス	=父の名字
ピカソ	=母の名字（マリア・ピカソ・ロベス）

ミノタウロス

ギリシャ神話のミノス王妃と牡牛の間に生まれた半獣半人の怪物。
動物的な野蛮さと人間的な理性など、ミノタウロスが持つ
二面性に、ピカソは自分を重ね合わせていました。



《ミノトローマシー》
1982年（原版画1935年）
タビスリー



作品のそれぞれのモチーフが
何を表しているか想像してみよう。

画家とモデル

マリー＝テレーズ・ワルテルと
出会った1920年代の終わりから
盛んに描かれるようになった
アトリエの情景。
モデルは変わっても
画家は常にピカソ自身であり、
モデルへの愛と、創作への
強い思いが表れています。



《画家とモデル》
1963年3月5日～9月20日
油彩、キャンバス

闘牛

スペイン生まれのピカソにとって闘牛は身近なもので、
晩年に南仏に移り住んでからは闘牛観戦に熱中しました。



《タウロマキア（闘牛）》
1957年
シュガーリフト・アクアティント、紙



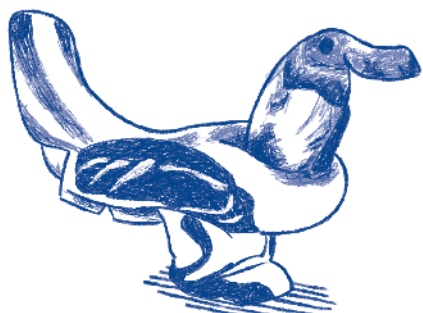
本の挿絵としてわずか3時間で
26枚を描きあげたよ。

ピカソの原動力 創作のモチーフ

「モチーフ」とは、作品をつくる「動機」や主な「題材」のことです。
ピカソはモチーフに自分を重ね合わせたり、身近な物や人たちを登場させたりしました。
ここでは現在展示中の作品をいくつか紹介します。

鳥

動物好きのピカソは、鳩やみみずく、
フクロウなどを得意としていました。
実際に鳩やフクロウを飼っていたこともありました。



《鳥》
1953年頃
セラミック

顔

ピカソが陶芸に興味をもったのは
65歳からで、最も多いのが顔。
丸皿の形を顔に見立てたそれらは、
みな愉快的顔たちです。



《顔》
1963年6月14日
セラミック

子供

ピカソは生涯を通じて
子供を描き続けました。
自分の子供を
モデルにすることも
多くありました。



《ピエロのボール》
（原画1929年）
ジェマイユ